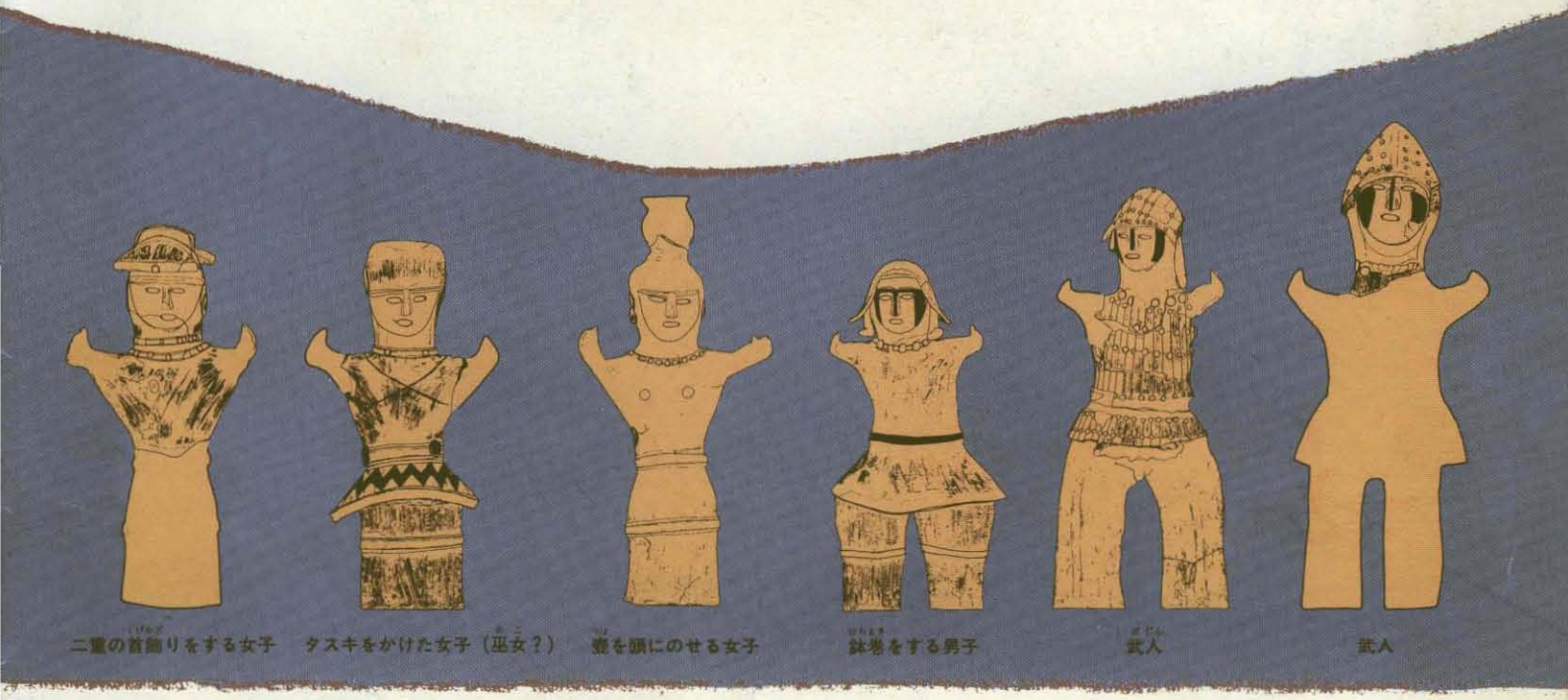
㈶東総文化財センター発掘調査報告書 第11集

1996 発掘

寺方遺跡

山の上には、古墳やお城があるというけれど、
山の東のすそでは何が見つかったのだろう……



小川台５号墳に立てられていた埴輪

光町・㈶東総文化財センター

いつ　1996年２月２日から同年２月14まで

どこで　千葉県匝瑳郡光町（市長村コード12-381）小川台滝井戸ほかにある
寺方遺跡（遺跡番号コード38、北緯35°41′12″、東経140°30′04″）において

だれが　千葉県教育委員会、光町教育委員会の指導のもとに財団法人 東総文化財センターが

何のために　町道0103号線の道路改良工事のため無くなってしまう遺跡の記録を残すことを第一の目的に

何をした　130㎡について発掘調査をしました

この本はその発掘調査の成果をまとめたものです。

なお、現地での発掘作業および室内での整理作業、報告書の作成は、調査研究員 實川理が担当しました。

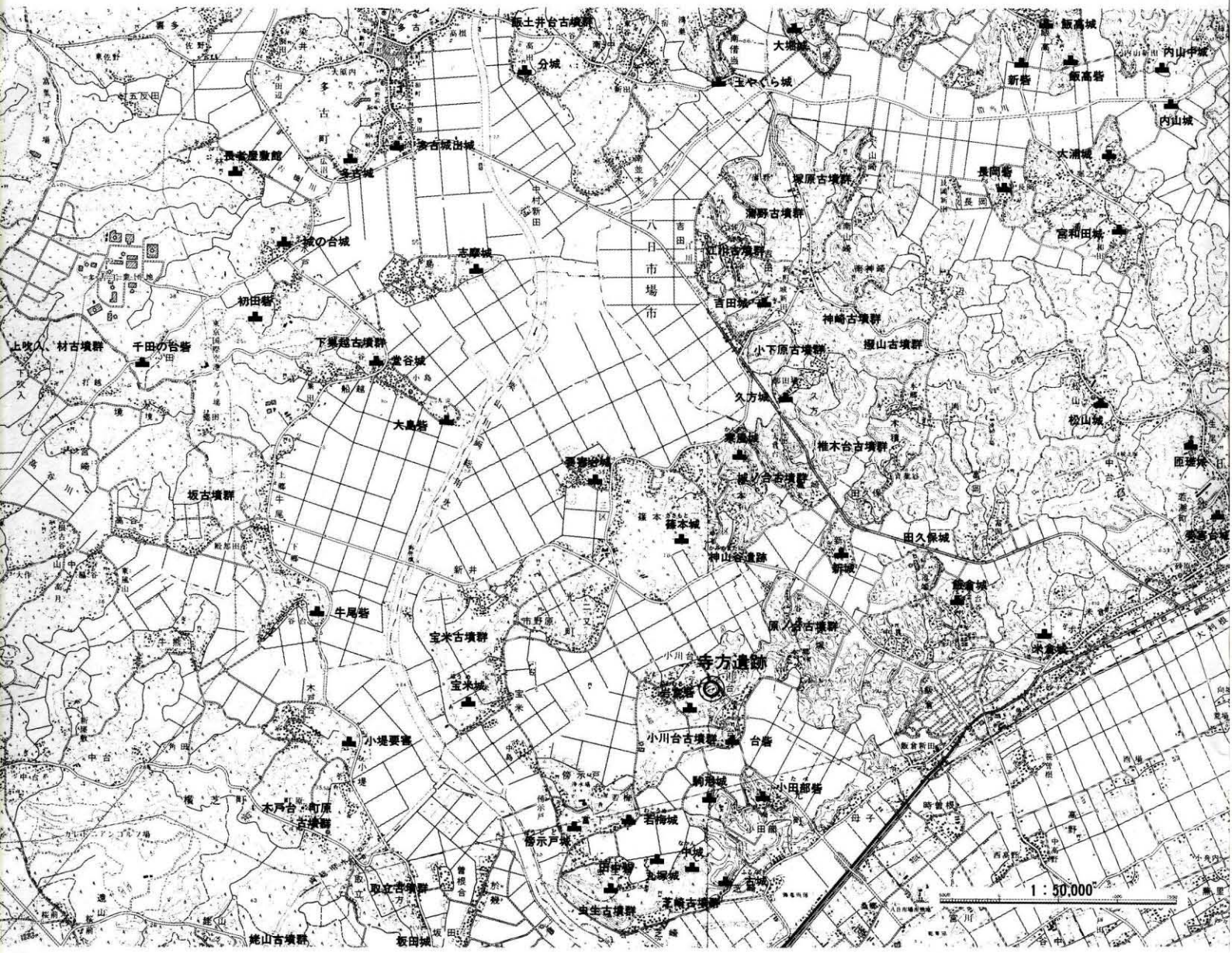


図１　遺跡の位置および周辺の古墳群と中世の城跡

調査の概要

調査は、試掘により調査区を限定しておこなった。便宜的に北側調査区、南側調査区と呼ぶ。

見つかった遺構　北側調査区では、溝が１条見つかった。溝の掘り方や、溝の中から見つかった土器から、西側の台地上に築かれている岩室砦（いわむろとりで）に関係する空堀と考えられる。他には近現代の撹乱と、それに伴う遺物がわずかに見つかっている。一方、南側調査区では、竪穴住居（古墳時代終末期）が３軒、掘立柱建物の柱穴が１基、土坑が１基見つかっている。土坑は、底面付近のみの遺存であり、出土遺物もないため、性格等は不明である。

寺方遺跡の時代　今回の調査では、竪穴住居などのはっきりとした遺構の見つかった**古墳時代**や**中世**の他に、古くは**縄紋時代前期**の終わり頃の土器のかけらや、また、**平安時代（９Ｃ代）**の土器のかけらも見つかっている。

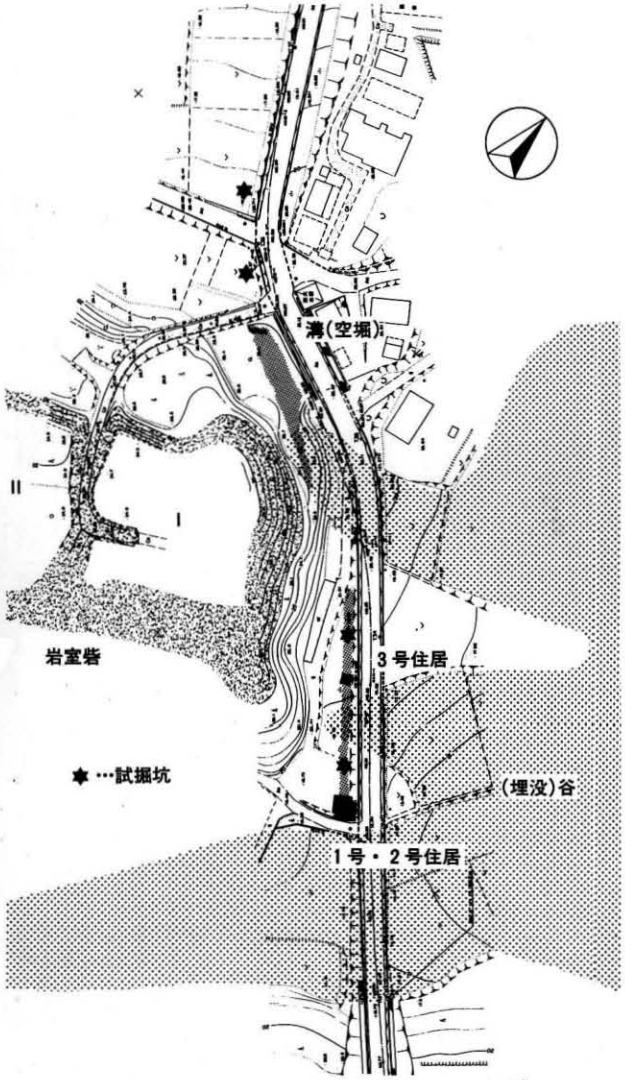


図２　調査した範囲と見つかった遺構（いこう）

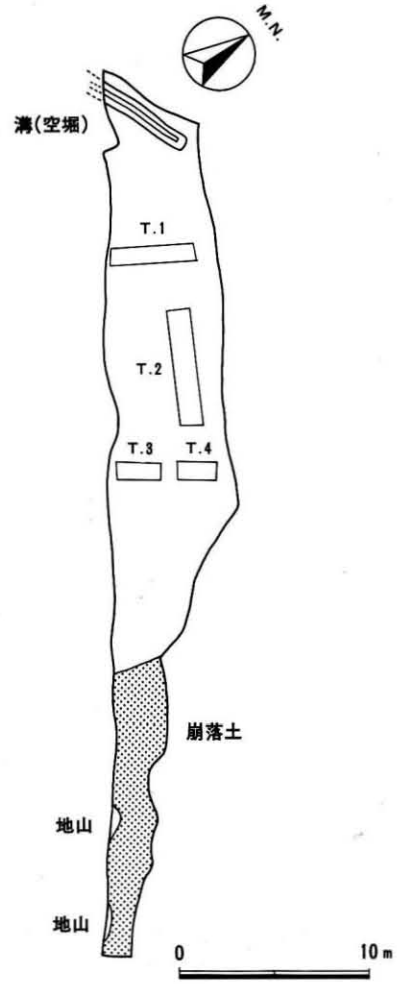


図３　北側調査区

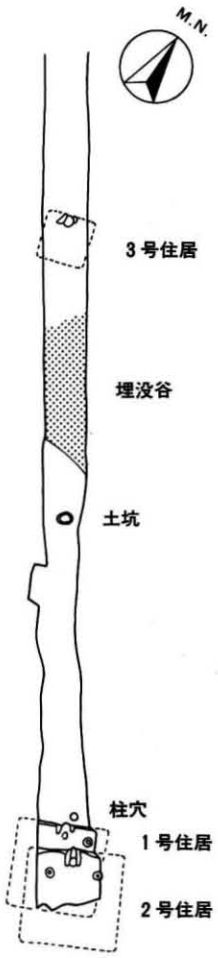
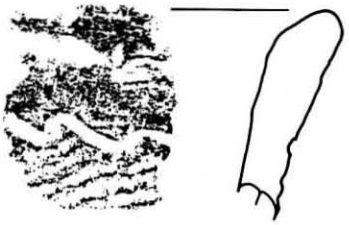


図４　南側調査区



縄紋土器は１片ではあるが、縄紋時代前期※の人間がこの付近で活躍した、りっぱな証拠である。また、今回の調査範囲では見つかっていないが、平安時代の住居も近くに存在する可能性が高い。

※（放射性炭素による年代測定によれば今から約5000年前）

図５　寺方遺跡から見つかった縄紋土器

何が見つかったのか？

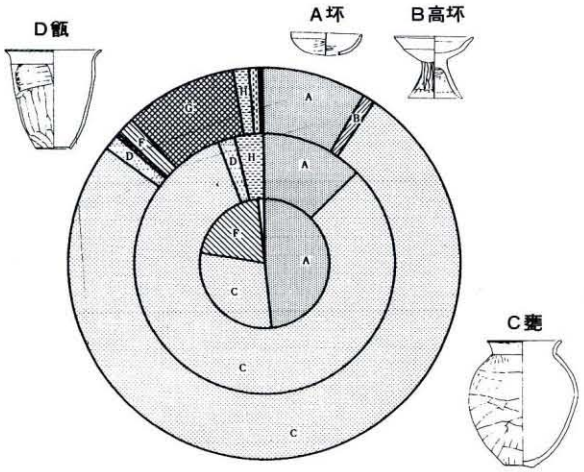
その１　古墳時代（終末期）の竪穴住居（約1350年前）

寺方遺跡１号住居・２号住居の時代は？

538（552）	仏教が伝わる	小川台５号墳（光町） 城山１号墳（小見川町） 殿塚古墳・姫塚古墳（芝山町） 金鈴塚古墳（木更津市） 関向古墳（八日市場市）
593	聖徳太子が推古天皇の摂政となる	
600	第１回　遣隋使	
645	大化の改新 中大兄皇子（天智天皇）・中臣（藤原）鎌足らが蘇我入鹿・蝦夷を滅ぼす	寺方１号・２号住居
710	平城京に都をうつす	

竪穴住居からは、何が、どのくらい見つかったのか？

竪穴住居から見つかるのは、当時の人達が使っていた道具などのうち、千数百年経っても腐らずに残っていたものだけです。つまり、木の器や籠、衣類などの多くは腐って残っておらず、もっぱら掘り出されるのは土器のかけらばかりなのです。



※実測図は坏を除き『酒直遺跡発掘調査報告書』より

（単位名：ｇ）

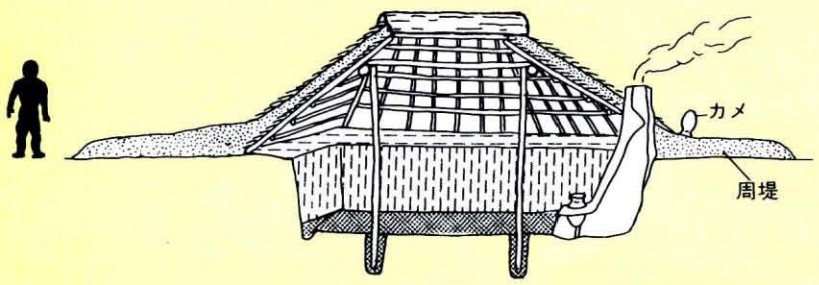
	SI-1	%	SI-2	%	SI-3	%
A－土師器 坏	523	8.7	368	12.7	28	48.4
B－土師器 高坏	62	1.0	0	0.0	0	0.0
C－土師器 甕	4,523	75.5	2,362	81.6	17	29.4
D－土師器 甑	78	1.3	60	2.1	0	0.0
E－須恵器 甑類？	19	0.3	0	0.0	0	0.0
F－須恵器 甕	90	1.5	0	0.0	12	20.7
G－支脚	558	9.3	0	0.0	0	0.0
H－焼粘土塊	75	1.3	105	3.6	0	0.0
I－土師器 坏（平安）	47	0.8	0	0.0	0	0.0
J－土師器 甕（平安）	10	0.2	0	0.0	0	0.0
K－その他	5	0.1	0	0.0	0.9	1.6
合　計	5,987		2,895		57.9	

今回の調査で見つかった土器は、表面（器面）が荒れて砂質に富んだ見かけをもつものが多い。竪穴住居に埋まっていた土が、水田の土に似て掘りずらくまた、帯水層に近い地層を掘り込んで竪穴住居がつくられていることから、埋没後、土中での劣化が進んだもの（阿部1995）と考えられる。

現代の住居と竪穴住居と掘立柱建物

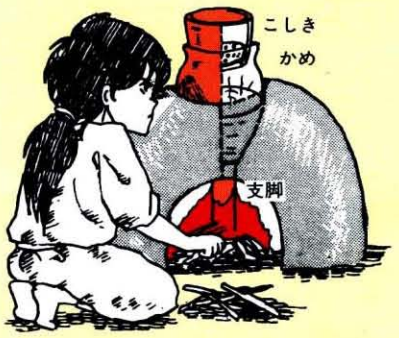
現代の日本の住居は、玄関を入ると靴を脱いで上にあがる。つまり床は地面よりも高い。**竪穴住居**は、土間が地面よりも低く、穴倉に入るといった感じのいわば半地下式住居。**掘立柱建物**は、床が地面と同じ平地建物か、地面よりも高い高床建物だが、規則的に方形にならんだ柱穴しか見つからず、判断は難しいものが多い。

竪穴住居復元図（断面）～群馬県子持村黒井峯遺跡の場合～



『日本の古代遺跡を掘る４　黒井峯遺跡　日本のポンペイ』より一部改変

カマドの使い方（推定復元図）

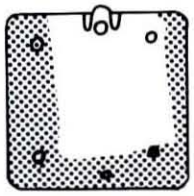


イラストは『むかしの和良比』より一部加筆

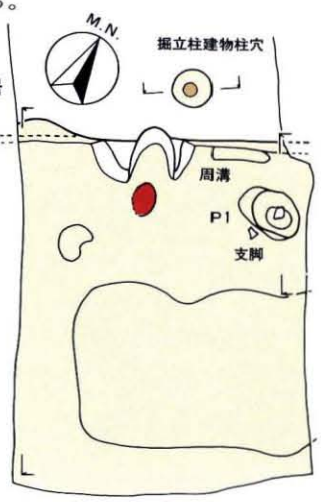
1号住居

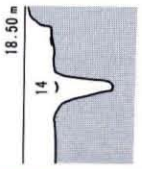
遺物の出土状況から、この住居に住んでいた人間（居住者）が引っ越す際に、竪穴住居を解体した（今泉1989）と考えられる例である。Ｐ１の南側の土間上には、カマドから抜き取られた支脚（27）と、おそらくカマドに掛けられていたであろう甕の破片（12）があり、Ｐ１内からは甕の破片（14）が見つかっている。Ｐ１内の甕の破片の存在から、柱が立っていたとは考えられず、柱穴の土層断面の観察でも柱痕跡土は確認できていないことから、柱は再利用するために抜き取られているものと考えられる。

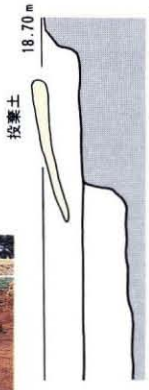
上記の遺物は、いずれもこの住居の居住者が残していったものと判断できるものである。他には、住居内で使われていたものが置き去りにされた（遺棄）と考えられるものは見当たらず、いずれも廃屋に捨てられた（廃棄）ものと考えられる。

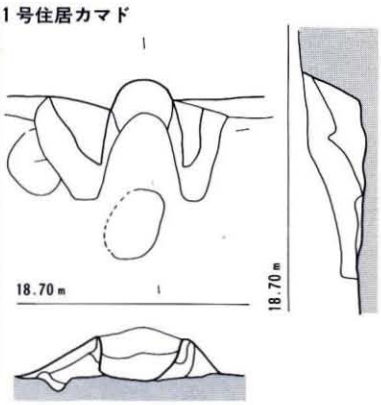


1号住居調査範囲模式図
●柱を立てるための穴が４つ●一方の壁の中央にカマド●カマドの反対側に出入口のはしご段をかける穴　がある。
※白ヌキが今回の調査範囲。







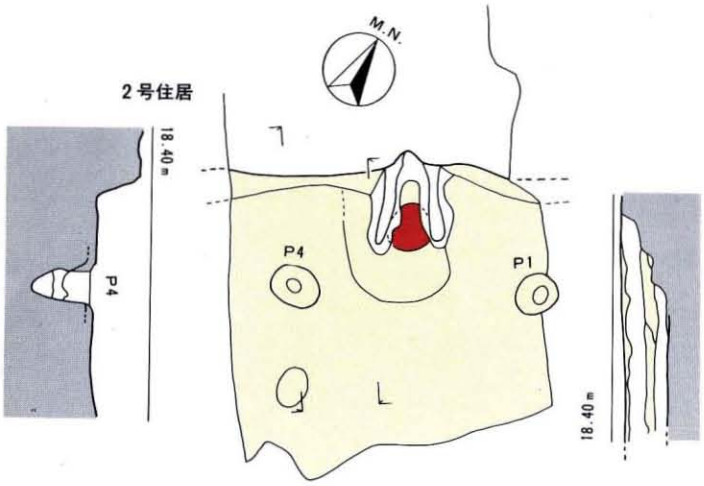


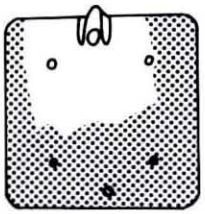
2号住居

柱穴は２本を調査。いずれも柱痕跡土は見られず、抜き取られているものと考えられる。

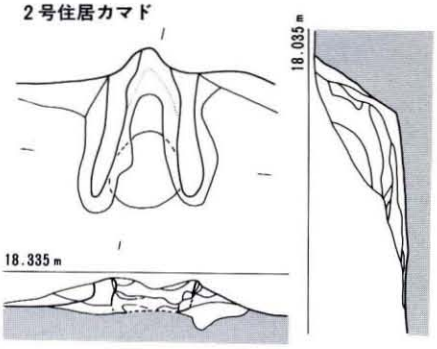
遺物は、遺棄と考えられるものはなく、すべて廃棄されたものであろう。今回の調査で唯一完全な形に近い土器（土師器の坏28）は、１号住居の土間の下、２号住居のカマドの上から見つかったものである。これも２号住居の居住者が残していったものとは言えない。

２号住居に埋まっていた土（覆土）を観察したところ、地山の土と同じ土がほぼ水平に堆積しており、あるいは２号住居が不用となり捨てられた（廃棄された）後まもなく、１号住居をつくる際に埋め戻したことを示しているかもしれない。





2号住居調査範囲模式図

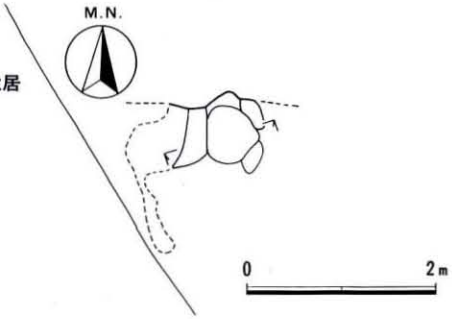


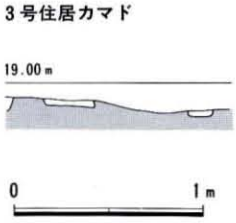
3号住居

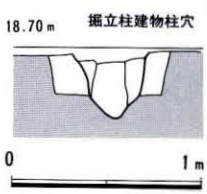
カマドの最下部の発見により、その存在が明らかになった。住居の大きさもはっきりわからない。ただし、竪穴住居をつくったときの痕跡（掘形）の一部から、１号住居・２号住居よりも小型と考えられる。

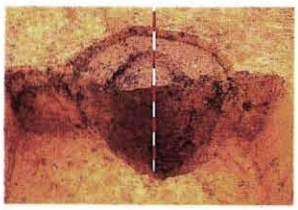
掘立柱建物の柱穴

中央が柱が腐った土（柱痕跡土）、両側が柱を柱穴に立て固定するために埋めた土。









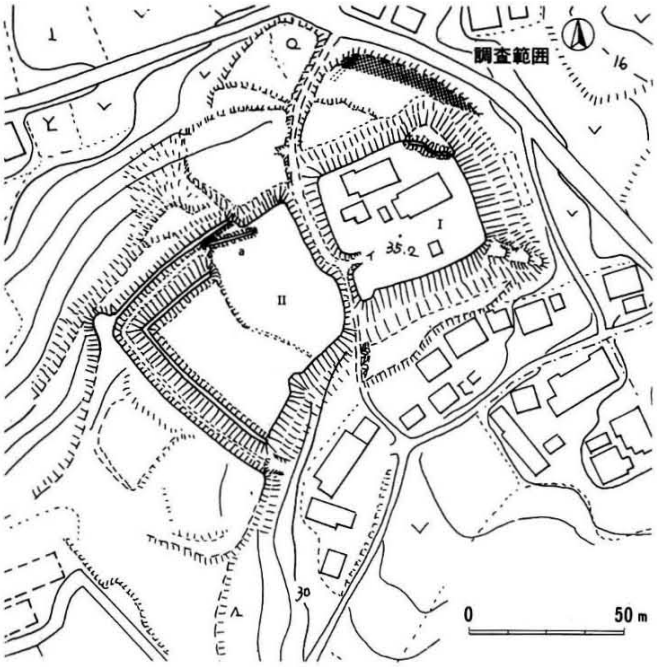
何が見つかったのか？

その２　中世のお城 ～岩室砦～ の空堀

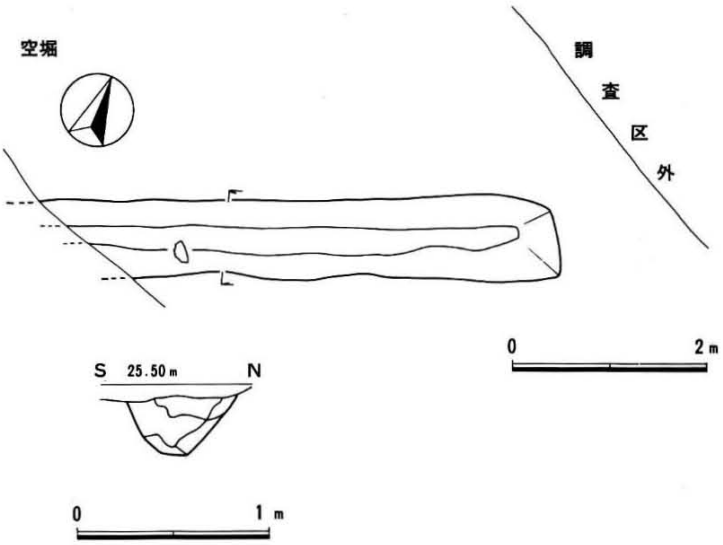
北側調査区では、岩室砦に関連する空堀が見つかった。防御のための土手である土塁の痕跡はないが、台地上に続く道が北側にあることから、南側に土塁を築いていた可能性はあるだろう。なお、空堀の南側には、近現代の土地利用痕跡（撹乱）のほかは、中世の穴（土坑）などは見つかっていない。

時期は、空堀から見つかった内耳土鍋が、古瀬戸後期の遺物と伴うものの特徴をもつ（笹生氏ご教示）ことから、15C代と考えられる。

今回の調査により、岩室砦が、台地上のみに展開するのではなく、そのすそにまで関連する遺構が分布することが明らかとなった。これは篠本城（城山遺跡）の調査成果とも一致し、城を考えるうえで見落とすことのできない部分であることがより確かものとなった。



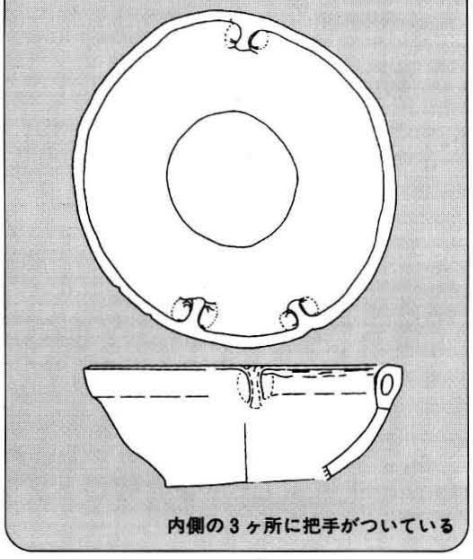
岩室砦概念図　『千葉県所在中近世城館跡詳細分布図調査報告書Ⅰ』
ー旧下総国地域ーより一部加筆



岩室砦

椎名胤光の孫の岩室資胤が岩室城を築いた、という伝承が残っているという。堀切により隔てられた２つ（？）の曲輪からなる。東の曲輪Ⅰが主郭。曲輪Ⅱの西側には、土塁と「L」字形の堀が良好に残る。

光町篠本城から見つかった内耳土鍋



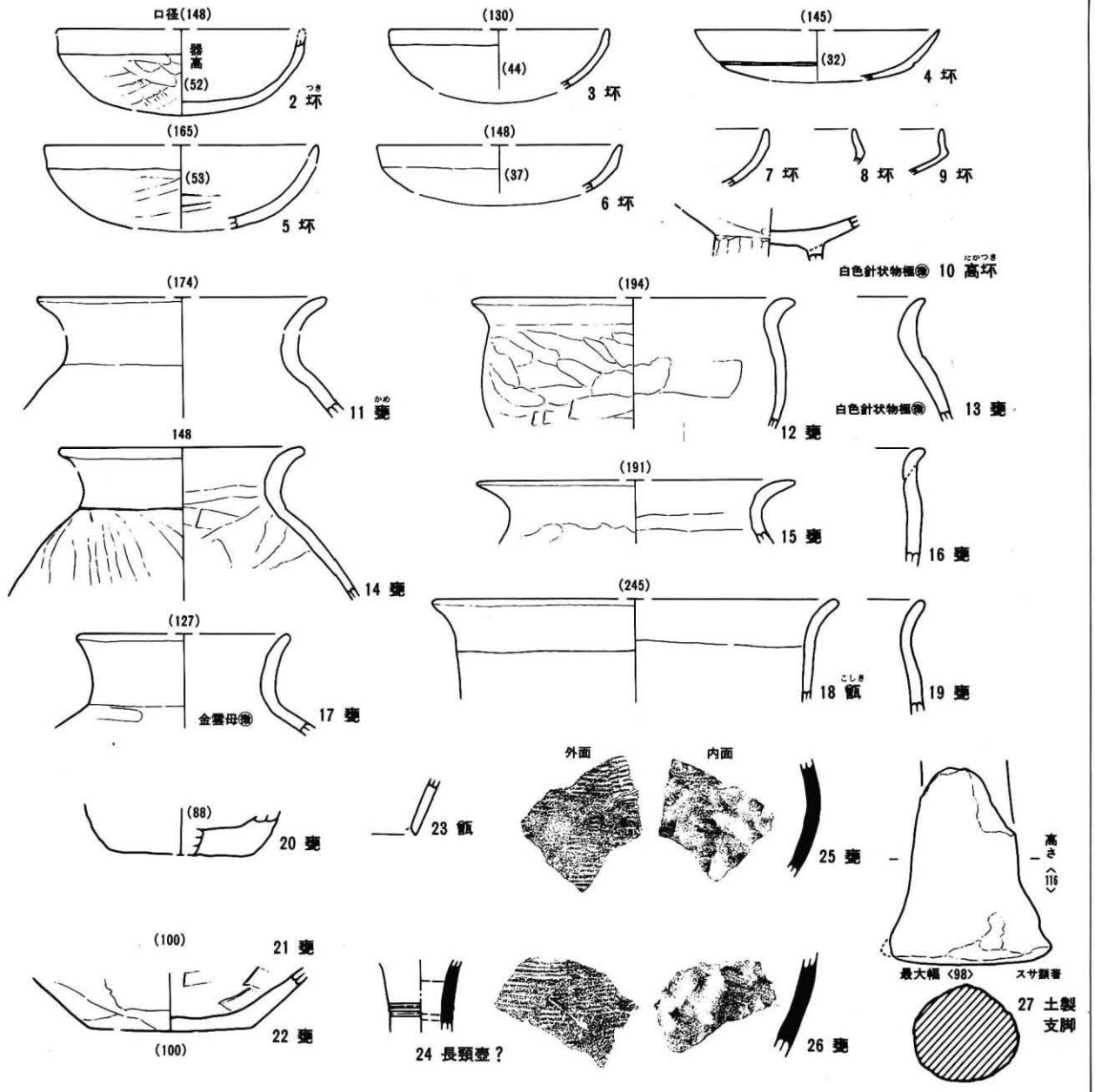
内側の３ヶ所に把手がついている

内耳土鍋の使い方（推定復元図）

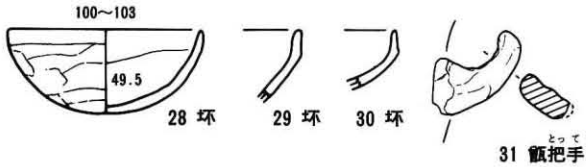
イラストは『むかしの和良比』より

古墳時代（終末期）

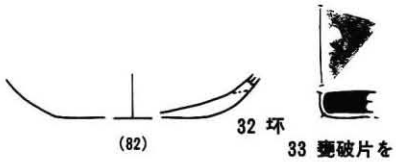
1号住居



2号住居



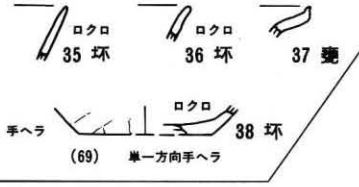
3号住居



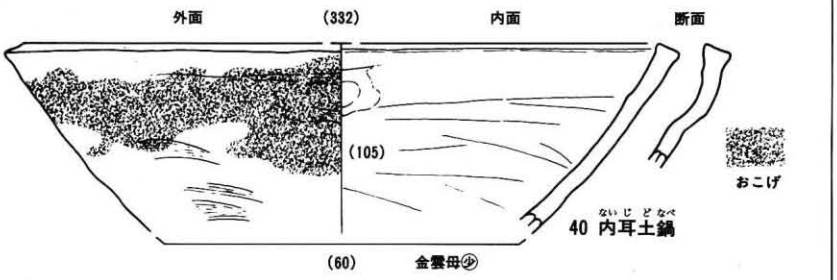
（空堀）

平安

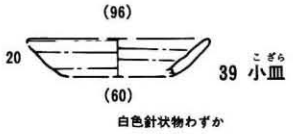
（1号住居）



空堀



室町



※遺物番号以外の数値は、計測値（単位は㎜）。（　）付は推定値、〈　〉付は遺存値を示す。
※ 2～23、28～32、34～38は土師器。24～26、33は須恵器。39・40は土師質土器。

0　10cm

撮影は㈱粟田商事による

《引用・参考文献》

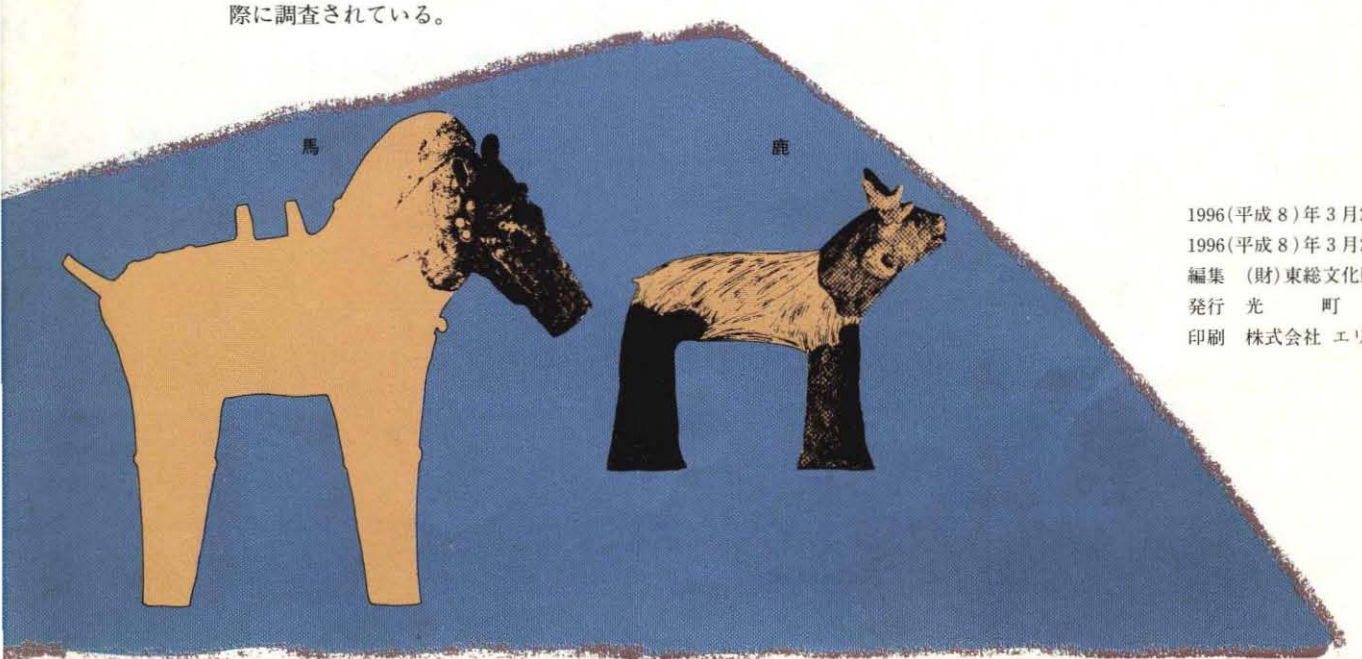
浜名徳永ほか（1975）『下総小川台古墳群－千葉県匝瑳郡光町小川台古墳群調査報告書－』八匝教育委員会・小川台古墳群調査団
芝山はにわ博物館（1977）『はにわ図録３　小川台古墳群・殿部田古墳群』
浜名徳永ほか（1980）『上総殿部田古墳　付宝馬古墳－千葉県山武郡芝山町殿部田・宝馬所在古墳調査報告書－』芝山はにわ博物館
福間　元ほか（1986）『酒直遺跡発掘調査報告書』酒直遺跡発掘調査会
今泉　潔（1989）「竪穴住居の解体と引越し」『史館』第21号　史館同人
荻　悦久（1990）「第４節　海匝地区」『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会
宮内勝巳（1991）「第１節　出土土器」『千葉県印旛郡栄町竜角寺尾上遺跡・竜角寺谷田川遺跡』㈶印旛郡市文化財センター　72～83頁
白井久美子・栗田則久・上野純司、萩原恭一（1992）『房総考古学ライブラリー６　古墳時代(2)』㈶千葉県文化財センター
芝山町立芝山古墳・はにわ博物館常設展示図録（1995）『総（ふさ）のくにの古墳と埴輪』芝山町立芝山古墳・はにわ博物館
阿部芳郎（1995）「土器焼きの火・料理の火－縄文土器にみられる使用痕跡と器体の劣化構造－」『考古学研究』第42巻 第３号
津田芳男（1989）「所謂内耳土器について」『茂原市文化財センター年報No.３　－昭和62年度－』㈶茂原市文化財センター
浅野晴樹（1991）「東国における中世在地系土器について－主に関東を中心にして－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集　国立歴史民俗博物館
笹生　衛（1991）「房総の中世土器様相について」『史館』第23号　史館同人
鳴田浩司・土屋潤一郎・大野康男・笹生衛・井上哲朗（1994）『房総考古学ライブラリー８　歴史時代(2)』㈶千葉県文化財センター
（1995）『シンポジウム　よみがえる篠本城跡　－戦国動乱期城郭の謎にせまる－（篠本城に見る房総の中世）』㈶東総文化財センター
八巻孝夫（1995）「光町岩室砦」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』千葉県教育委員会

《発掘調査参加者》明石静子、飯田勝恵、飯田好江、宇井ふみ、大木美津江、岡村安、香取信子、金杉なか子、鎌形タカ、鎌形一、久古千恵、佐藤輝江、高根たか、寺本はな、戸村ハツ、長谷川ヒデ子、林かね、林せつ子、林なか、林むつ子、平山利子、山口富枝、椎名文雄
《整理作業参加者》飯田幸江、印東明美、佐久間孝子、佐藤政代、高橋淳子
《ご教示いただいた方々》萩悦久、笹生衛、福間元、道澤明、宮内勝巳
《ご協力いただいた方々》村越賢司、村越すゐ、平和建設興業㈱および㈲高木土木の工事関係のみなさま

以上、ここに記して感謝いたします。

小川台古墳群

栗山川から東側が、下海上（しもつうなかみ）と呼ばれていたころに、小川台を中心とする地城を支配していた人たちのお墓。確認されているだけでも、前方後円墳５基、円墳13基、方墳１基の計19基からなる。１号墳が５Ｃ後半につくられた後、６Ｃ後半以降つぎつぎつくられているようである。これらのうち５基が1974年（Ｓ49）年、農業構造改善事業の際に調査されている。



1996（平成８）年３月20日　印刷
1996（平成８）年３月25日　発行
編集　（財）東総文化財センター
発行　光　　町
印刷　株式会社 エリート印刷